

(光人社刊・亀井宏著、ガダルカナル戦記第一巻)によれば

ガブツ港は、ツラギ港の東に隣接した好錨地で、長さ六十七メートルの棧橋その他の港湾施設があった。マカンボ島には棧橋および給水施設のほか、小型船舶用の船台、造船の際、船体をのせる台(ク)があった。シド丁からの定期船がほぼ六週間ほどの間隔を置いて、これらの島に寄港した。

当時、右の島々を占領していた日本軍兵力は左の通りであった。

ツラギ島 第八根拠地隊麾下(きか)配下)の第八十四警備隊約二百名で第十四設営隊の一部八十八名、その他五十六名で、八十八警の一部五十名がガブツ島に防備のため派遣されていた。指揮官は鈴木正明中佐であった。

ガブツおよびタナンボコ島 第五空襲部隊麾下の横浜海軍航空隊約四百名(一部欠)と第八十四警備隊派遣隊五十名、米軍の反抗のあった八月七日当時の航空兵力は、九七式大艇七機と二式水上戦闘機九機であった。

右方面の主要装備兵器は八センチ高角砲六門、十三ミリ機銃六基であった。

七日の早朝、連日暗雲にとざされた哨戒飛行の隙間をぬって突入してきた敵艦載機による第一波攻撃で、水上基地にあった飛行機が不意をつかれ潰滅状態になった。敵はカブツ島北東海岸めがけて上陸用舟艇をくり出してきた。三回にわたった波状の上陸であった。ほぼ一個大隊の兵力である。

日本軍は上陸してきたこの敵に対し、ガブツ島一四八高地およびタナンボコ島高地の両陣地からはさむような格好で集中砲火を浴びせた。とくに二二二高地からの迎撃は敵の背後から撃つかたちとなつて、効果は大きかった。

タナンボコ島に対する海と空からの敵の攻撃は、七日の昼間からはじまっていたが、上陸部隊が進撃してきたのは、夜になつてからである。舟艇六隻に分乗してきたが、そのうち三隻分の兵士がこの短い時間に戦死したといわれている。午後八時頃の戦闘であった。右の失敗にこりた敵は翌八日になつて一個大隊をツラギとカブツ、タナンボコにふりわけて投入したのであった。

上陸した米軍は、ガブツ島一四八高地にたてこもつて、最後の抵抗をこころみようとす。る日本軍守備隊をしいに追いつめる。同時に、午後二時すぎになつてさかんな艦砲射撃の支援のもとに、一個大隊をタナンボコ島におくりこんだ。この部隊は、二輛の戦車を先

におしたてて進んで来た。

日本軍兵士たちはこの戦車に対してほとんど素手で立ち向かわざるをえなかった。戦車の厚い鉄鋼板にたいして、小銃は無力である。鉄材あるいは丸太のようなもので前進を妨害し、ガソリンをしみこませたぼろ布をもって炎上させ、擲座かぐぞ(ぞ)せしめようとしたり。横浜航空隊指令・宮崎重敏大佐ら幹部はこのとき、戦車にたいして肉薄攻撃をかけ、のちに全員が戦死したのだらうとされている。

こつした戦鬪をくりかえすうち、敵はタナンボ島南端に橋頭堡(きやうとうぼ)を確保し、兵力をあとめた。指揮官をつけない、重要な陣地をつばわれながら、日本軍兵士はなお珊瑚礁や洞窟などにひそんで抵抗をつづけた。

タナンボ島の日本軍が完全に沈黙したのは、翌九日の払暁であった。ガブツ、タナンボコ方面の捕虜(とらひ)二十名とこつ記録がのびている。またシラキ島の場合とおなじく、約七十名ほどがフロリダ島に脱出したといわれている。ただしこれはこの方面の戦鬪に従事した米軍兵士の間になさやかれた口碑(こうひ)にちかいかいものであって、人数およびそのゆくえなど、正確なところは、今日にいたるも不明である。じつたんはフロリダ島に渡った物がないことは事実であったにせよ、死んだか捕虜になったのであらうとこつのが、この戦鬪にたいする今日の大まかな結論である。

以上のように記されているが、「浜空」で生き残ったものは宮川政一郎・一等整備兵と私のほか数名だけであった。たまたまこの数日間、海上は暗雲が立ちこめて、わが哨戒機敵の襲撃を警戒する飛行機(ひこうき)の索敵活動をさまたげていた。この島を標的にした敵航空母艦がその間隙をぬって接近し、不運にもわが方の発見が遅れて、取り返しつかぬ致命的結果を招いた。早く探知できなかつたことが残念でならなかつた。

# 運命の日

その頃の戦局は

一九四二年（昭和十七年）

八月 七日 米海兵一個師団、ソロモン諸島ツラギ、ガダルカナル島に上陸

八日

第一次ソロモン海戦。外南洋部隊の重巡五隻、軽巡二隻、

駆逐艦一隻米豪連合水上部隊重巡他二十六隻と交戦。

十八日

一木支隊先遣隊、ガダルカナル島上陸。

十九日

一木支隊主力、攻撃開始。

二十一日

ほとんど全滅。

二十四日

第二次ソロモン海戦。

二十五日

ガダルカナル島増援機動部隊、米機動部隊と交戦。

二十九日

第二七駆逐隊陸戦隊、ナウル島占領。

二十九日

川口支隊その他、ガダルカナル島へ増援開始。

精進寺軍航空隊  
士官室と星野軍医長の住居



## 空襲・見張り

星野軍医長のいる士官室は南方特有の住居で高床式であった。縁の下はちょうどかがめば頭がつかえない程度の高さがあつて、風通しがよく広々としていたから、私はそこへ折り畳み式の簡易ベッドを持ちこんで、寝起きをしていた。

運命の日、昭和十七年八月七日早朝四時すこしまわつた頃、爆音がした。

当時わが軍には、九七大艇(偵察機)七機と向い側(フロリダ島側)の海岸を基地にして水戦(二式水上戦闘機)九機が待機していた。

わが軍の九七式が上空哨戒に出るのは通常五時すぎ、私はそれと間違えていた。

今朝は、馬鹿に早いなと思つた。しかしわれわれの機はボロボロ機なのでボロボロという音、キーンという耳馴れぬ金属音に比べて外へ飛び出し見上げると、星のマークをつけた米軍機が、敵飛行士の眼鏡をかけた姿まで見えるほどの低空で飛びまわつていった。急いでチンケース海軍では石油など燃料を入れる一斗缶をこつとよんでいた(を)が、んが、ん叩いて「敵襲——」と叫びながら総員起しをしまわつた。

こちらからは見通せないフロリダ島の西側海域に敵の航空母艦がいて、山越えに朝霧のなかを低空で偵察にやつてきたのだつた。

私は士官六、七名とともに士官壕へ急ぎ入つた。

敵偵察機が引き返して五分から十分後、グラマン戦闘機の編隊が次々と現れて、爆撃と銃撃を繰り返して、辺り一面、地獄さながらの様相と化した。

大艇は海上のあちこちに緊留されていた。搭乗員はゴム艇(ゴムボード)に乗って機に乗り移ったときにグラマンの一斉銃撃にあい、飛び立とうとしていた機は火を吹いて炎上し、乗員はみな大火傷を負った。

虎の子の水戦もこのとき、一機も飛び立てずに全部銃撃でやられてしまった。敵機は、空母に戻つては爆弾をつみ、爆撃をなんどもくりかえした。

また、駆逐艦がガダルカナルの西からツラギの方へ入つてきて砲撃をしかけてきた。

私の入った士官壕はツラギ、ガダルカナル方面がよく見える海側にあつたので、敵艦側からも士官たちの出入りがまる見えだつたのだらう。格好の標的にされて集中砲火をあびた。朝の八時から十時ぐらゐまでが爆撃と艦砲射撃とで一番ひどかつた。士官ともどこの壕にはいたたまれず、砲火の合間をかくくつて走つては伏せ、走つては伏せながら反対側の大きい壕に避難、一旦全員集結した。

ツラギへはこちらより先に、何百パイと思える敵の上陸用舟艇が走つていくのをわれわれは見ていた。この時は勝田副長(中佐)が参謀格になつて作戦を立て、隊員に命令をくだした。

敵は今夜こちらへもきつと上陸してくる。士官壕側の海辺はサンゴ礁が遠浅のよつに広がつていて、舟の腹をけすつてしまひ上がつてはつかれまい。上陸地点はむしろわれわれが今いる大きい壕側、波止場側から上陸してくると予測していた。

空襲のやんだとき、あちらへ各個、こちらへ各個と上陸してきそつな波止場や海辺へ二百リッター入り燃料のドラム缶を全員で急ぎ配置した。

私が近くの発電所付近にドラム缶を並べて戻つたときには、火傷を負つた重傷の搭乗員たちが壕の中に横たわつていて、もう入る余地がなかつた。身を裂く苦痛にうなづいている者や、上官の中には軍医にどこを切つたら薬に死ねるか自決の方法を聞く人もいた。

私は壕内に入れずもたもたしていた。宮川ともう一人も入り口からはみ出たよつな格好でいた。なんの因果関係のない三人がたまたま入り口でもたつていたばかりに、

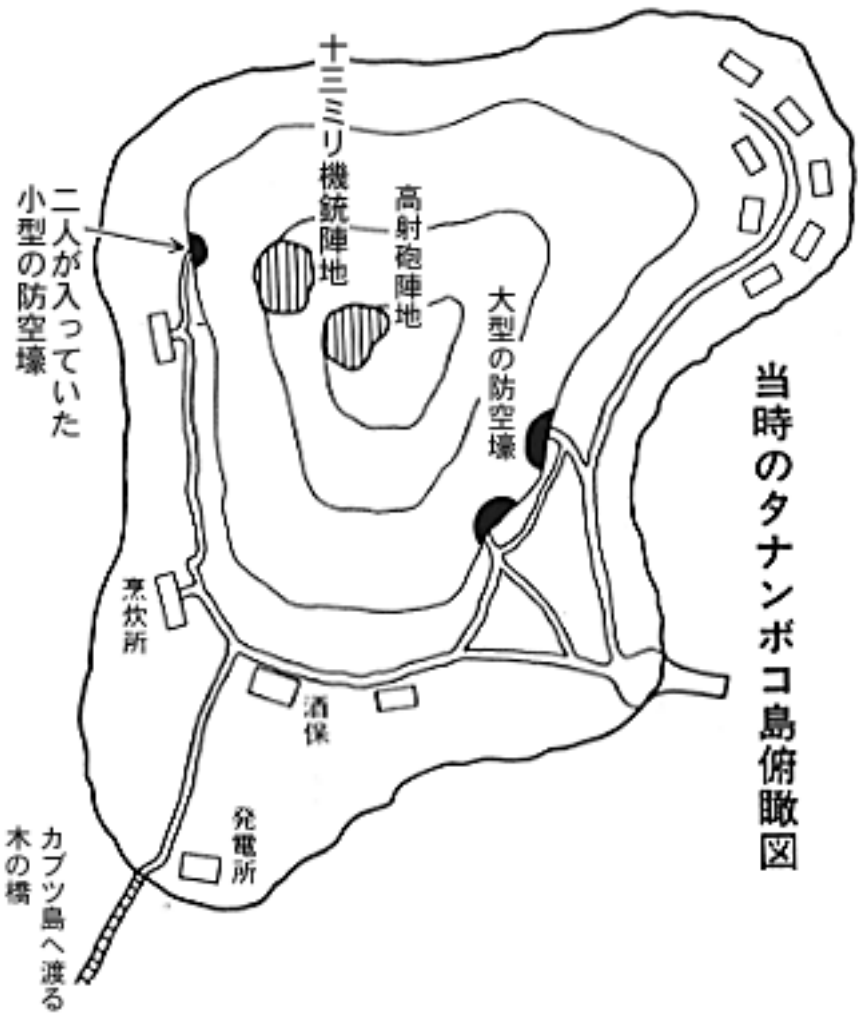
司令の勝田副長から

「お前ら、けがをしていないなら向の壕で見張りをこつこつ」

と六倍の双眼鏡を渡されたときは、中にいれてもらえないくやしさを、多くの戦友たちとはなればなれになる心細さ、またあの集中砲火を浴びはしないかの不安とで、身のちぢ

まる思いがした。命令なのでしかたなく、宮川一等整備兵と私ともう一人の三人だけが、弾雨の中をもとの壕へもどった。

### 当時のタナンボコ島俯瞰図



この時が運命の岐れ目になった。

その夜八時が九時ごろ、勝田副長が予測したとおり、米軍の上陸用舟艇は、こちらに悟られないように、途中からエンジンをきめて襲来した。

われわれ航空部隊は陸上で戦ったための武器をほとんど持たず、わけていない部隊だった。

くっく

第三回は十二月二十二日(火)の予定